

令和4年度実施分 秋田大学地域におけるDX推進プログラム（リテラシー）
自己点検・評価報告書

令和5年2月28日
秋田大学学務系委員長会議

1. 総評

数理・データサイエンス・AI教育に関するリテラシーレベルの知識修得のために、教養教育科目の「情報と知識・技術Ⅰ」の1単位を取得し、さらに、「基礎情報学、基礎AI学、基礎データサイエンス学Ⅰ、基礎データサイエンス学Ⅱ（情報学入門、AI学入門、データサイエンス学入門Ⅰ、データサイエンス学入門Ⅱ）」のうち1単位を取得することでプログラム修了とする「秋田大学地域におけるDX推進プログラム」を実施している。令和4年度においては、令和6年度から新たな枠組み（「全学共通のオンデマンド授業としての概論科目設定」「リテラシー科目の必修化または選択必修化」）でのリテラシー科目を実施すべく検討を行った。

2. 「学内からの視点」における自己点検・評価の体制及び結果

・プログラムの履修・修得状況

学務系委員長会議において、プログラムの履修・修得状況の報告を定期的に行い、学生の出席状況や授業の進行状況を把握している。また、LMSを活用し、受講者ごとに課題の提出状況や進捗状況を把握することができる。これらの点検をもとに、次期開講のクラス編成や授業実施形態などの改善に結び付けている。

・学修成果

毎回の授業において、小テストを課題として課している。その実施状況および正答率などにより、本講義受講者・授業担当者の両者が授業内容に対する理解度を確認している。

・学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度

受講生全員に対し授業アンケートを実施しており、その結果を学務系委員長会議で分析・検証する体制を整えている。アンケートでは、定量的評価を目的とした多肢選択式項目に加え、自由記述項目も設けており、「これからの仕事や生活の場面で必要不可欠な知識が網羅されていて、大変勉強になった。」「ある先生は実際の例を上げつつものごとを説明していて、とても興味をそそられた。情報技術の名前や詳細を学ぶなら実例に即して学ぶとイメージしやすい。」「オンデマンドゆえ講義を受けやすかったのだが、質問が浮かばないことが多かった。掲示板を用意していただいたのに申し訳ない。」など、本授業内容を理解している様子が確認できた。

・学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度

本教育プログラム受講生全員に対して授業評価アンケートを実施しており、授業全体の満足度、説明のわかりやすさ、シラバスのわかりやすさなどを調査し、後輩等への学生の推奨度が上がるよう改善をしている。また全教養教育科目では、「学生からの評価が高い科目」を全学生に公開しているので、当該授業の評価が高くなれば、次年度履修生への推奨度が上がることになる。

・全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況

令和4年度には、学務系委員長会議において、リテラシー科目の基軸となる「情報と知識・技術Ⅰ」を、令和6年度から「データサイエンスリテラシー概論」とし、1科目でリテラシーに関する知識をある程度把握できる体制とすべく議論を重ねている。

さらに、令和4年度から、必修化または選択必修化に向けて検討を始めており、履修者数及び履修率向上に向け、着実に前進している。

3. 「学外からの視点」における自己点検・評価の体制及び結果

・教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価

本教育プログラムの修了認定者の名簿を適切に管理する体制を整備している。これにより、卒業予定者アンケート、進路・就職状況等、本学で収集している各種データとの照合が可能となり、追跡調査も効率的に行うことができる。なお、現時点では本教育プログラムを修了した卒業生はまだいないが、1期生卒業以降、地元の民間企業、地方公共団体等の就職先に対して「教育成果の検証アンケート」を実施し、本プログラム修了生の活躍状況や評価を調査することとしている。

・産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見

秋田大学では、秋田デジタルイノベーション推進コンソーシアムと連携し、地元企業・自治体と懇談の場を設け、情報交換や意見交換を行っている。その中で、データサイエンスやAIのリテラシー教育について、本学の教育に期待することや、社会に出てから必要となる知識・能力について情報収集している。参加企業、自治体からは、秋田大学の取り組みに高い期待が寄せられ、好意的に受け止められている。今後もコンソーシアムの場で定期的に意見を収集できる体制を整えている。

4. その他

・数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること

本教育プログラムは各学部の数理・データサイエンス・AI教育担当教員が担当となり、「情報と知識・技術Ⅰ」の講義を行っている。動画コンテンツを利用することによりモデルカリキュラムリテラシーレベルに準じた内容を展開するとともに、数理・データサイエンス・AIが学生が所属する学部の領域で活用されている最新の事例、実例などを取り上げ、学生にとっては興味を持ちやすい内容となっている。

・内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること

受講のための前提知識を、全学共通のレベルに抑える一方、講義資料を充実させ、知識が少ない人は資料を読んで補うことができるように、また、知識がある人は読み飛ばすことができるように工夫している。さらに、数式を多用して重要事項を説明するのではなく、図やグラフ等を用い、視覚的にも理解が進むようにスライド資料を工夫している。

また、身近な事項を考察の対象とした方が理解が進みやすいため、令和4年度には、スポーツ、将棋、物流および製造業、公共サービス、金融、ヘルスケアの各分野を取りあげ、その応用事例を学ぶなど工夫している。こうした工夫の効果は、アンケートや課題提出時の感想等をもとに検証し、授業改善に繋げている。